



## キュビズムの絵画と「現実」を見つめる眼

松井 裕美 (美学美術史)

著作権の関係から、  
写真を掲載していません。  
ご了承ください。

「現実」をどのように認識するのか。これは芸術における一般的な問題のひとつですが、20世紀初めにこの問いに取り組むことで前衛的表現を生み出したのが、キュビズムの画家たちでした。彼らは、「現実」が精神においてどのように再構成されているのかという問いから様々な考察を導き出し、その痕跡を絵画のなかに表現しました。詩人アポリネールは、1912年にこれを「概念の現実」と呼んでいます。

キュビズムの画家ロベール・ドロローネーによる《パリの町》を見てみましょう。中央に並んだ三人の裸婦の身体は、トーンの異なる小さな幾何学に分割されています。画家は、対象を各々の面に分解して把握しながら、それらを繋ぎ合わせ、全体として安定した比率の身体像を生み出しています。彼女たちは「パリスの審判」というギリシャ神話に登場する三人の女神だと考えられています。この主題設定には、パリという作品の舞台との言葉遊びが意図されているのです。左手にはセーヌ川に架かる橋があり、その手前をフランスの国旗を掲げた汽船が横切っています。右手にはエッフェル塔が見えますが、各部分は別の方向から見られたもので、それらの断片を構築するように描かれています。このように、一見すると現実からは乖離しているキュビズムの作品のなかにも、対象を断片的に認識し再構築する芸術家の眼、そして神話の世界と近代都市を絵画という想像の空間で統合する芸術家の思想を読み取ることができます。

20世紀の芸術家にとっての現実性とはどのようなものなのか、それは当時の思想や社会とどのように関連していたのか、こういった問題に取り組むことを、美術史の研究を通して行っていきたいと考えています。

学生たちの研究生活—File16

## 英語の不思議

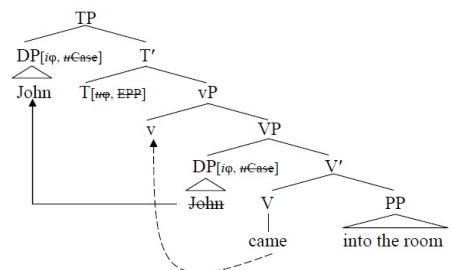
研究室名：英語学研究室

(1a)に示されるように、英語において多くの場合、主語は動詞の前に現れなければならない。このことは、(1b)において、いきなり動詞から始まる文が許されないことから明らかである。(1b)における\*は、その文が非文法的であることを表している。)

- (1) a. John came into the room.
- b. \*Came John into the room.

さて、こうした事実の背後には、(2)に示されるように、動詞の前には特定の構造位置があり、その位置は何かによって埋められなければならないという普遍的な原理が存在するでしょう。(この要求は、伝統的にはEPP(拡大投射原理)と呼ばれる。)

- (2) [TP \_\_\_\_\_ [vP came John into the room ]]



すると、(1a)では、下線部は John によって埋められているため、文法的である一方、(1b)では、何者によっても埋められていないため、非文法的であると考えられる。こうして、主語は動詞の前に現れなければならないという事実は、EPP という一般的な原理を使って説明される。

他方で興味深いことに、英語は(3)に示されるような構文も持ち、そこでは主語が動詞の後ろに現れている点が奇妙である。

(3) Into the room came John.

それならば、(3)では、主語に代わって前置詞句が問題の下線部を埋めていると提案しよう。(3)では、EPP による要求は into the room によって満たされるため、John は動詞前に現れる必要がないのである。このように、一見したところ奇妙に見える文であっても、問題の構造位置を埋めろという一般原理を守りながら、きちんと言語の決まりの枠内に収まっているのである。

さて、英語学は言語学の中でも、その研究人口が最も多い。英語で論文を執筆すれば、世界中の研究者と考えを共有・議論することができる。こうして、新たに知識を発見しながら、それを自らも発信できることが、研究の醍醐味だと考える。

[小池 晃次 (博士後期 2 年)]

### 学生たちの研究生活—File17

## 哲学は何のために？

研究室名：哲学研究室

人は人命を救助するために医学を勉強する。人は自然の現象を知るために物理学を勉強する。人はものを作るために工学を勉強する。しかし、人は何のために哲学を勉強するのか。もし哲学を学ぶ人百人にそのように聞いてみたら、百通りの答えが返ってくるであろう。Philosophia (哲学) の原義は「知を愛すること」であり、その目的は「知」そのものを研究することである。哲学を勉強するとは、真の答えを持たない問いの答えを探すことである。

「私はなぜウメボシが好きではないのか」や、「私はあの人を本当に愛しているのか」と考えるとき、人は実際、「哲学をしている」と言える。「ものが好き」とは何であるか。「人を愛する」とは何であるか。

それらの問いに答えはない。それにもかかわらず、人々は絶えずそれらの答えを探している。人間である限り、私たちは考える。

例えば、全ての存在するものは何処かに在る、とする。なぜなら、「存在する」ことというのは「ある場所に在る」ことだからである。しかし、「場所」とは何であるか。場所に有るものと同じように、「場所」は存在するものだが、その「場所」はいったい何処に存在するのだろうか。古代ギリシャから、哲学者はその問題について議論しているが、それは正しい答えが見出せない問いである。この問題を扱うのは topology (場所論) であり、それが私の現在の研究テーマである。

哲学研究者として、私は他の人のために考えるのではなく、他の人を考えさせるために哲学を勉強する。哲学を学ぶ者は上記の難しい問いに答えることはできないが、周りの人が自分で答えを探すのを手伝うことができるのである。

[Felipe Ferrari Gonçalves (博士後期 2 年)]

最近の文学部

### 追い込みの季節… (お互いががんばりましょう)

「私のランプの荒涼とした光が／白色で守られた空虚な紙の上に」(マラルメ「海の微風」)。空白のページやパソコンの画面の前に頭を抱えるのは、受験生、卒論執筆の4回生、論文や書類作成中の教員、19世紀のフランス詩人も皆同じです。(YK)

\*本紙では、名大文学部の多彩な内容を順に紹介していきますが、それまで待てない人は…  
名大文学部のWEBサイト <http://www.lit.nagoya-u.ac.jp/> まで (『月刊名大文学部』のバックナンバーもあります)